

会 議 録

- 1 会議名 第1回 次世代まちづくり構想会議
- 2 開催日時 令和8年8月24日（月） 15時00分～16時20分
- 3 開催場所 北九州市役所 3階 大集会室
- 4 出席者氏名 別添「出席者名簿」のとおり
- 5 会議概要 配布の資料に基づき事務局より説明し、意見交換。

6 会議経過（発言要旨）

意見交換の冒頭、北九州市長（武内 和久）より、

- ・ 闊達な意見交換に向けて、ファシリテーター設置を提案する。

北九州市ご出身で、これからの時代を築く若い世代として全国적으로活躍の

野嶋 紗己子 様にファシリテートをしていただいてはどうか。

との発言があり、出席者が賛同したため、野嶋 紗己子 構成員がファシリテーターを務めることとなった。

【テーマ1】基本的な考え方、投資を呼び込む勝ち筋について

《津田 純嗣 構成員》

- 老朽化が進む北九州市を更新し、若者が喜び、その結果として高齢者も楽しく暮らせるまちにしたい。
- 2043 年は、今以上に技術革新や温暖化が進行する。さらにその先の 20 年も見据え、長期的に持続できる都市を構想すべきである。
- 小倉・黒崎の 2 拠点に集中する方針は、最初の一步を明確にする点で評価できる。一方、他地域が取り残されたと感じないよう、その後の展開も見える形にする必要がある。
- 人口減少とインフラ維持の厳しさを踏まえ、コンパクトシティの考え方を念頭に置いて 2 拠点の取組を進めるべきである。
- 北九州市は、本州と九州、西九州・南九州を結ぶ交通の結節点であることが強みである。
- 小倉・黒崎は、市民が集まるだけでなく、来訪者が集まる場所として発想する必要がある。
- 新幹線による東西方向のアクセスは強みである一方、南方面・東九州方面とのつながりが弱い点は課題である。ただし、今回の議論では対象を広げすぎず、南・東九州との接続は意識しつつも、当面は小倉・黒崎に集中すべきである。

《安永 卓生 構成員》

- 九州工業大学の学生約 5,500 人のうち約 3,000 人が北九州市で生活しており、学生が北

九州市で次のテックを生み出せる場を整えることが重要である。

- 「職」と「住」が近接するだけでなく、生活の中に技術が入り込む状態を北九州の特色にできる。
- 人材を固定的に引き留めるだけでなく、東京などとの間を行き来する「Ｏターン」のような関係を保ち、学びを仕事や新産業につなげるべきである。
小倉・黒崎を中心に、大学・居住・就業・人の交流がつながることで、新しい産業や技術が生まれる都市を目指すべきである。
- フィジカルＡＩを、職住のうち特に「住」の場にも実際に入り込ませることが必要である。
- 人々の受け止め方に加え、既存の規制にとらわれず、実証しやすい特区などの環境整備が必要である。
- 自動運転の車や各種ロボットが動く地域のように、実生活の中で技術を試せるエリアを北九州につくることが重要である。

《柳井 雅人 構成員》

- 華やかな将来像だけでなく、その裏側を支えるインフラを考える必要がある。
- 北九州市の強みである新エネルギーや、安価で安定した豊富な水を生かし、企業や人の集積につなげるべきである。
- 人口減少を踏まえ、コンパクトシティを計画にとどめず着実に実行する必要がある。
- 実行に伴う反発や調整の難しさがあっても、最後までやり切る姿勢が重要である。
- 各拠点の性格・役割を明確にすれば、多核型の都市構造そのものは維持できる。
拠点間を結ぶネットワークをしっかりと構築することが重要である。
- 拠点だけを見るのではなく、周辺の後背地も同時に育てる必要がある。

《大島 まな 構成員》

- まちづくりには「安全・便利・快適」が基本的に大事である。
今回の戦略は、これに加え「ワクワク」という付加価値をつけていくものと認識している。
- 文化を継承・創造する担い手は地域住民であり、北九州には公害克服や商店街の活性化や美化活動など、市民が地域づくりを協働で担ってきた蓄積がある。
- ハードを整備するだけでは持続しないため、市民活動や市民参画の余地のある空間づくりや協創のプロセスが重要である。
- 高齢社会を健康・福祉・消費の可能性として捉えるとともに、女性の潜在力も掘り起こして、まちづくりやビジネスにつなげていくべきである。

《清田 徳明 構成員》

- 戦略の実現には、民間主導で投資を促すことが大前提となる。
- 誘致したい分野を一定程度定め（例えば先端産業、不動産、エネルギー、ライフスタイルなど）、横串を刺すことでインパクトを作っていく必要がある。
- 「日本・アジアで最も実証実験がしやすい街」のような、強いインパクトのある位置付けを設け、企業にとって具体的なメリットをパッケージ化し、市側から売り込む必要が

ある。

- 市民の皆様や、誘致する企業側の視点から、まちのあり方がどうあるべきか、しっかり定めていく必要がある。
- フィジカルA Iは北九州の独自カラーをつくるのに適している。
- 「北九州に来れば、素早く、面白い実証ができる」と認識される環境が、有力なアピールポイントになる。
- 実証の場だけでなく、行政が継続して支援し、事業者に寄り添う体制も必要である。

《中田 昌宏 構成員》

- 外部から見ると、北九州市はコンパクトで、歩いて生活しやすく、生活物価水準も比較的低い点が強みである。
- 福岡・博多の代替を目指すのではなく、フィジカルA IやG Xの実装都市にするなど、他都市とコンセプトの違いを出すことが勝ち筋と思う。
- 「フィジカルA I」「エンタメ・カルチャー」「アーバンネイチャー」を並列に置くだけでは分かり辛いので、三者がどう連動するかを示すことが大事である。
- 継続的な投資には、2043年の北九州の基幹産業をどのようにとらえるのかがポイントである。
- 世界に誇る産業基盤、技術、人材育成力を、フィジカルA Iやエンタメ、環境も含めてどう結びつけ、若者が学び、働き、そして戻って挑戦できる都市にすることが重要である。

《唐池 恒二 構成員》

- 小倉にも黒崎にも、投資したいと思うような、歩きたくなるまちの雰囲気を作るところから始めた方がよいのではないかと思う。
- 「住んでよし、訪れてよし、働いてよし」という3点セットの良いまちが発展する。
- 歩いて楽しいまちづくりをしないと、観光客は来ないし、もちろん住んでいる人も楽しくない。まず、歩いて楽しいまちづくりから行うべきである。
- 別府の衰退と再生の事例から、大型施設の内部だけで完結させず、まちを歩いて回遊する仕組みをつくる必要がある。
- まちの魅力には、安全安心、食と買い物、そして歩きたくなることの3つが必要である。
- 八幡製鉄所や安川電機の工場見学は、北九州市ならではの「歩いて楽しめる」強いコンテンツになり得る。

《宮坂 春花 構成員》

- 投資や企業誘致が進む一方、新しい環境に適應できる層と不安を抱える層の分断が生じることを懸念している。
- 市外に出た学生・卒業生と、いかに関わりやつながりを維持できるかが重要である。
- 小倉・黒崎だけでなく、他地区との関わりや、増加する外国籍住民との繋がりを支えていく観点も重要になる。
- 若者が早い段階から、社会の変化や課題を身近に感じ、自分なりの疑問を持てる環境を

つくるべきである。

○若者目線から言うと、エンタメの誘致や教育環境の整備などを期待する。

○若者を甘やかすのではなく、伴走し、応援し、味方となる仕組みが必要である。

行政が規制やルールをしっかり作ったうえで、自由な活動や働き方ができる場を作り上げていくチャンスである。

【当日欠席の構成員からのご意見】

《小笠原 浩 構成員》

○民間投資を呼び込むには、促進パッケージのうち、特に「規制緩和・特区活用」と「税制・財政措置」の2つが実現のカギとなる。

規制緩和が特に大変だと思うが、前に進めてほしい。

○小倉の Bay エリアについて、北九州メッセとミクニワールドスタジアム北九州だけでは、どうしてもスケール感が小さい。大きな目玉が必要である。

【テーマ2】投資を呼び込む課題について

小倉について

《津田 純嗣 構成員》

○スポーツやエンタメには幅広いファン層があり、遠方からも来訪を促せるため、新幹線で来やすい立地を生かし、多様な催事を受け入れられるアリーナのような集客拠点が必要である。

○ビジター向けの施設に偏らず、市民も日常的に集まり、楽しめる場所として Bay エリアを育てる必要がある。

○温暖化を踏まえ、樹木や日陰を十分に確保し、「涼しく外で過ごせる」空間をつくることも重要である。

○現状は多様なイベントを行っていても、それらに適した専門的な施設がない。

これをきちんとした形で、アリーナやベニユーとして市民・来訪者が楽しめる空間を作っていくべきである。

《清田 徳明 構成員》

○アリーナやスタジアムという「箱」を作るというより、フェスやeスポーツなどソフトの受け皿を作っていかなければならない。

○Bay エリアへの来訪者を南側へ誘導するには、歩きやすく、歩いて楽しい動線が必要である。

○夏季の歩行を考え、木陰、ベンチ、休憩場所をセットで整えるべきである。

○旦過市場に代表される食・ガストロノミーの魅力を組み合わせ、楽しませることで南側への回遊を促すことが重要である。

《安永 卓生 構成員》

○ウォーカブルなまちの中に、フィジカル A I 等のテックを溶け込ませるか、例えば、食など日常体験の裏側にテックが隠れているようなまちをいかに作り込むかが重要。

- ハードとして出来上がって終わりではなく、コンセプトは維持していきつつ、新しいテックを入れながらまちを変えていくことが大事である。
- まちを一度作って終わりにすると、投資が厳しくなるし、年代も上がっていくため、小倉では、ずっと人が入り続ける仕掛け、若い人が入り続けられる面白みがある空間を提供していくべきである。

黒崎について

《津田 純嗣 構成員》

- 黒崎を「職住接近のまち」とする方向性は、交通利便性や背後の企業群との近さから非常に良い発想である。
- クロサキメイト跡は、黒崎の大きな課題であるという認識を共有している。
クロサキメイト跡の土地は大きく、相当な規模の生活圏を形成できる可能性がある。
その意味では、クロサキメイト跡の再生が起爆剤になることを期待している。

《柳井 雅人 構成員》

- クロサキメイト跡については、中途半端な施設の建設を急いで決める必要はない。
- 研究施設も選択肢ではあるが、単位面積当たりの付加価値は高くないため、それよりも人の交流が生まれるような施設を考えるべきである。どのような年齢層の人が利用し、どういう交流が生まれるかを調査研究した上で、ふさわしい施設を考えるべきである。
- 適切な施設が見つからなければ、緑の多い公園として住環境を高めることも一手である。
社会の変化を見ながら、じっくりと検討すべきである。

【当日欠席の構成員からのご意見】

《小笠原 浩 構成員》

- 国内を向いては1兆円の実現性はなく、海外へ向くべきである。
これまでの延長の考え方では成功しない、大胆な発想が必要である。
- 投資の判断基準について、製造業であれば費用対効果や物流面に加え、グローバルで見て市場があるかが重要である。
- 投資する上で、いろいろな規制があると、面倒だからもう投資しないというケースもあり得る。
グローバルに投資を呼び込んでいくには、協議をしながら緩和を進めていくのではなく、最初から大胆に緩和しておくべきである。

7 問い合わせ先

都市戦略局 都市再生推進部 都市再生課
電話番号 093-582-2565

第1回 次世代まちづくり構想会議 出席者名簿

(50音順・敬称略)

氏 名	所 属	出席
大島 まな	公益財団法人 アジア女性交流・研究フォーラム 理事長	○
小笠原 浩	株式会社安川電機 代表取締役会長兼社長	
唐池 恒二	九州旅客鉄道株式会社 相談役	○
清田 徳明	TOTO株式会社 代表取締役会長	○
津田 純嗣	北九州商工会議所 会頭	○
中田 昌宏	日本製鉄株式会社 常務執行役員 九州製鉄所長	○
野嶋 紗己子	PIVOT株式会社 MC／プロデューサー	○ (オンライン)
宮坂 春花	株式会社Mahal. KitaQ 代表取締役 (Z世代課パートナーズ)	○
安永 卓生	九州工業大学 学長	○
柳井 雅人	北九州市立大学 学長	○
武内 和久	北九州市長	○
大庭 千賀子	北九州市 副市長	○
館 圭輔	北九州市 副市長	○
片山 憲一	北九州市 副市長	○